ネイティブ・アメリカンの世界２

阿子島　香

［東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行⑧］

2024 年 11 月 23 日

講座要旨

今年度の館長講座も、最終回となりました。ご来場いただき、有難うございます。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんとご一緒に巡っています。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ね、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えてきました。お楽しみいただけたならば、幸いです。歴史博物館を広くみれば、世界的にも「博物館学」という研究分野があって、日本の養成課程では「学芸員資格」を取得する要件に多くの関連科目があります。今年の館長講座は、いわば「博物館展示論」と、「世界史の散策」とのクロスオーバーと考えていただけたなら幸いです。講座では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全 24 回の内容と関連させて、お話しました。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館の HP にて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています)。あわせてご参照いただければうれしく存じます。

考古学とは、人類のあらゆる過去の世界を、残された物質的資料（遺跡・遺構・遺物）から復元し、歴史を考えていく研究分野です。前回と今回、２回の対象はアメリカ考古学・民族学で、館長が 1980 年以来、40 年以上にわたり研究してきた地域です。その中から前回は、「ミシシッピ文化」という、東部地域の考古学遺産を取り上げました。今回は、別の文化領域を取り上げて、先住民たちの歴史と現在を考えます。近年日本でも重視されるようになり、博物館法改正の背景にもなっている「文化観光」の参考にもなるかと思います。

前回からのつながりで、少し振り返ります。アメリカ・インディアンは、ネイティブ・アメリカンと同じ意味で、米国連邦政府によれば、現在 566 の民族（部族）集団が認定されています。加えて各州政府による認定は、約 70 部族になります。2010 年の国勢調査では、ネイティブ・アメリカンの人口は、約 309 万人となっています。彼らの居住地はアメリカの西部地域に保留地（Indian Reservation）が多く存在し、独立した自治区になっていることが多い現状です。もともとは、全米のあらゆる地域に、アメリカ・インディアンの諸部族が、さまざまな環境に適応しながら生活していました。

非常に多様なアメリカ・インディアン諸族を、大きく生活様式と環境という面から大別して、文化内容を整理したのが、アメリカ民族学（＝文化人類学）での、「文化領域」という概念でした。代表的な研究者として、ウィスラーがあげられます（Clark Wissler, 1870 -

1947)。文化領域（Culture area）によって、現在も受け継がれている類別的な理解がなされ、また博物館などでの収蔵資料の体系化が進みました。「年代 - 領域仮説」は、文化領域の中心から順次、さまざまな文化要素は拡がり、周辺には古い様相が残るという考え方です。現在、広く受け入れられている文化領域は、次のような大別です。アメリカ極北文化領域、アメリカ亜極北文化領域、北西海岸文化領域、西部高原文化領域、大盆地文化領域、大平原文化領域、南西部文化領域、カリフォルニア文化領域、北東部文化領域、南東部文化領域になります。

前回は、北東部と南東部の考古学的古代文化を考えました。カホキア遺跡などです。今回は、大平原文化領域（Plains culture area）と、南西部文化領域（Southwest culture area）の、民族誌を考えます。この両文化領域には、館長は何年も住んでいたので格別の「土地カン」がある地域です。ワイオミング州は大平原文化領域の、ニューメキシコ州は南西部文化領域の、それぞれ典型的なエリアでした。前者はプレーリーの草原地帯、後者は半砂漠の乾燥地帯です。前者ではプレーンズインディアンの諸族、シャイアン族、スー族、オマハ族などの文化を、後者では、プエブロインディアン諸族、特にズニ族の文化を、多くのスライドでご紹介します。

平原インディアン諸族の文化は、言語的な分類（人々の系統を示す歴史的な意味がある）が多様でも、大きな共通点を持っていました。それは、バッファロー（アメリカヤギュウ、バイソン）の大群に対応して、移動生活を行ない、日常生活のための資源は、ほとんどをバッファローに依存していたという点です。食料（保存食）、衣服、靴、住居（移動式のテント、ティピ、ティーピー）、日用品、装身具、祭祀の道具などで、多くの民族資料（歴史的な民具にあたる）が、各地博物館に保管されています。創成神話、太陽踊り（Sun Dance）の儀礼体系がよく知られています。西部開拓時代には、騎馬民族となっていました。北米に6000 万頭生息していたと推定されるバッファローは、合衆国側の政策で、ほぼ絶滅の状況となりました。騎兵隊と平原インディアン諸族の間は戦争状態となり（19 世紀後半）、勇猛果敢なインディアンたちは、白人たちの脅威で、西部劇映画にも「悪役」とされて登場します。

南西部のプエブロインディアン諸族の文化は、プエブロと呼ばれる集合集落に、人口が集中して居住する生活様式（集住）です。トウモロコシ農耕を中心に、植物採集や狩猟など、多角的な生業経済を構築していました。ニューメキシコ州には、多くのプエブロがあって、それぞれ部族を構成しています。ズニ族は、アリゾナ州との境界付近の集団です。ルース・ベネディクトの「文化の型」理論では、「アポロ型」の典型とされていました。土器制作や、銀細工などの工芸に優れています。ホピ族と共通する「カチナ儀礼」を行ない、カチナ人形が制作されました。このような儀礼は、プエブロ集落の中の「キヴァ Kiva」という円形施設で行われました。プエブロインディアン諸族は、かつての「チャコ文化」の系統をひく人々です。チャコキャニオンの大集落遺跡群が終焉を迎えて、移動分散し、南西部の現在につながる歴史は、文化要素や神話などからも推定されます。

対照的な文化領域を比較し、ネイティブ・アメリカンの多彩な世界を実感してください。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、項目的に紹介します。

・「文化領域」Culture area の考え方は、『アメリカ・インディアン』(1917) などで展開されたクラーク・ウィスラーの所説で、非常に複雑なインディアン諸族の文化要素を、空間と時間の次元の中に整理してまとめようとしたもの。時間的には、「年代・領域原理」(年代・領域仮説 Age area hypothesis) とセットになる概念で、インディアン諸族の文化史の復元を目指す研究方向であり、歴史志向的な考え方のひとつである。学史的にはクローバーの歴史主義的な民族学（また「文化の超有機体説」でも知られる）と軌を一にすると評価できるだろう。ウィスラーはニューヨークのアメリカ自然史博物館で研究し、イェール大学で教鞭をとった。人類学の学説史では、20 世紀前半の「ウィーン学派」の歴史民族学に、共通の関心を認めることができよう。ウィーン学派は、東北大学文学部日本文化研究施設におられた石田英一郎先生（杉山晃一先生の恩師）の学流であった。大林太良先生も、同じ系統といえた。

・文化要素の複合が連続して分布する領域をまとめていく考え方は、民族学による記述（民族誌）と整合するので、北米に限らずに世界的に応用された。年代的（時間軸）な意味を解釈とするには、実証的な根拠が問われるので、年代・領域原理はむしろ年代・領域仮説として受け入れられてきた。世界的に 1920 年代からは、長期的なフィールドワークによる機能主義人類学（マリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウンなど）の登場で、民族学（＝文化人類学）は大きく変化した。しかし歴史的に文化を復元して現在の文化要素や文化複合の分布を考える「文化史」的な研究は、博物館資料の記述や、各部族文化の相互比較、民族史（エスノヒストリー)、また考古学との接点がある。そのような意義もあって、百年以上も前からの「文化領域」の概念は近年も引き継がれている。広義の人類学分野の中でも、考古学・歴史学系統と、社会学・心理学系統の研究者の間では、研究史のとらえ方にも相当の違いがあるようだ。文化領域や文化層、比較神話学のような分野は、前者で重視される。現代社会と先住民文化をめぐる問い掛けは、後者で重要な課題とされるが、現在を知るには過去を遡る必要が不可欠なので、両者は補完的というべきである。歴史民族学は「古くさい」というイメージがあるならば、それはかなりの誤解である。

・北米では、おおむね次のように文化領域が大別されており、非常に多様な大陸の自然環境との関連をもって理解されている。それぞれの文化領域の特徴について、ごくざっくりと簡単に見てみよう（スライドで地図)。

American arctic: アメリカ極北文化領域。カナダハドソン湾周辺から北極海に沿って、アラスカ半島を回る沿岸部。極寒の土地に居住するエスキモー（カナダではイヌイットと呼ぶが同じ民族）の諸集団の文化。氷雪やツンドラ地帯で生き抜く人々。

American Subarctic: アメリカ亜極北文化領域。極北文化領域の南側に広く分布。自然環境は大陸針葉樹林帯（タイガ地帯）。湖沼も多い。東部にはアルゴンキン語族の諸集団、西部にはアサパスカン語族の諸集団を主に居住。冬季には非常に寒冷になる環境で、狩猟採集や漁労を営んで生活。

Northwest Coast: 北西海岸文化領域。アラスカ南部から、カナダ西部沿岸のバンクーバー島周辺、米国西部沿岸州の多くの民族集団。特にサケ・マス類の漁労を盛んに行なうバンクーバー島付近の諸族（クワキュートル族、ヌートッカ族、ハイダ族など）が一般によく知られている。クワキュートル族は、ベネディクトによって「ディオニソス型」の陶酔的な文化パターンを有するとされた。これらの民族では、「ポトラッチ」という儀礼的な競争的散財を行なう。社会統合段階的には、狩猟漁労民でありながら、階層化した首長制社会を構成していたとされる。大木に神話を彫刻した「トーテム・ポール」を村に立てて、祖先の物語を表わし、氏族の歴史記念碑とする。

California: カリフォルニア文化領域。北米沿岸の南部カリフォルニア州の多様な人々。カリフォルニア・インディアンとして総称されて、以前から北西海岸文化領域とともに、縄文文化の実態を考える参考の民族誌とされてきた研究史がある。北西海岸文化領域は川を遡上するサケ・マス類、カリフォルニア文化領域は、ドングリ類が生業において重要である。

Plateau: 西部高原文化領域。ロッキー山脈の北部で、山岳地帯と森林地帯に居住する諸族。アサパスカン語族の人々は近年までも狩猟生活の適応に巧みである。亜極北文化領域にかけて、トナカイが大群で移動する地でもある。また山地にはヤマヒツジが生息する。

Great Basin: 大盆地文化領域。西部高原文化領域の南で、広大なロッキー山脈南部と半砂漠地帯に居住する人々。ネヴァダ州などグレートベースンの自然環境は非常に不毛に見えるが、マツの実、ウサギなど、さまざまな動植物を季節的に巧みに組み合わせて、環境適応を確立していた。季節差によるバンド集団サイズの変動、移動生活の仕組みなどが、1930年代から研究されて（スチュワードの業績など）、文化生態学の分野で知られている。ショショニ族、パイユート族など。

Southwest: 南西部文化領域。アリゾナ州やニューメキシコ州など、北米南西部の乾燥地帯に居住。北米最大の部族集団ナバホ族（現在ナバホ国 Navajo Nation を構成）、キヴァという神聖な円形空間で行なわれるカチナ儀礼と、現在は民芸品となっているカチナ人形で有名なホピ族、アドビ（日干し煉瓦）や石造の集合集落に住むプエブロインディアンの諸族が含まれる。農耕はトウモロコシが主作物である。先史時代には、アナサジ、ホホカム、モゴヨンの 3 つの文化圏に分かれていた。

Plains: 大平原文化領域。ロッキー山脈の東山麓から、中西部ミシシッピ川流域まで広がる広大な草原地帯、The Great Plains で、広範囲を移動して生活していた諸族。大草原は東側で草丈（草の高さ）が高く、西側で低い。丈の高い草原は、プレーリーと呼ばれる。大平原を大群で疾駆するバッファロー（アメリカヤギュウ、バイソン）が、生活の中で非常に重要であった。アメリカの西部開拓時代（19 世紀）には、バッファローの絶滅政策によって、

生活の糧を奪われた平原インディアン諸族との、戦争状態になった。シャイアン族、スー族、オマハ族、アパッチ族、コマンチ族など。西部劇映画でもしばしば描かれているが、映画は偏見に満ちている悪役イメージ（館長の強調コメント）。

Northeast: 北東部文化領域。東部の五大湖周辺から東海岸まで、広い地域は、かつては多くのインディアン諸族の生活の場であった。イギリスやフランスの初期開拓者たちは、北東部文化領域の人びとと早くから接触し、記録が残る。モヒカン族、イロコイ部族同盟など。プロテスタント開拓者たちと交渉があった歴史は、たとえば感謝祭でターキー（七面鳥）を食する習慣などに見られる。西方で、大平原文化領域とつながるオジブワ族などは、スー族のラコタ支族と反目していて、大平原諸族の歴史的な居住地移動をもたらす要因になったとされる。

Southeast: 南東部文化領域。温暖で自然の恵み豊かな米国南部には、トウモロコシ農耕を中心に、複合的な農耕（マメ類、カボチャ、ヒマワリなど）、アパラチア山脈などでの狩猟、多くの河川、沿岸での漁労といった多角的生業に基盤をもつ多くの先住民文化が栄えていた。前回に解説したミシシッピ文化は代表的な先史文化であった。またヨーロッパ人との接触期にも、南からのスペイン人、東方からのイギリス人、フランス人の記録がある。いち早くヨーロッパ人との交渉過程で「文明化」（ヨーロッパ人の視点からです、ご注意あれ）、文化変容し、文字を発明し新聞刊行もあったチェロキー族など、独自の文化が栄えた。が、抑圧されるのも早く、オクラホマへの強制移住は、「チェロキー涙の道」（1830 年）と言われ、多くの犠牲者が出た。その後、南東部文化領域の土地は、アフリカからの奴隷を使役した一大綿花プランテーション地帯となり、南北戦争期を迎えることになった。

以上、一般的なイメージを含めて、北米の文化領域の区分を見てみた。実際は非常に複雑な部族間の関係や、歴史的移動があり、また年代によっても大きな変化があった。ヨーロッパ人がもたらした疫病（インフルエンザ、はしか、天然痘ほか、多くの病気に対して北米先住民には免疫が無かった）は破壊的であった。一方、ウマは先住民同士の交易でどんどん奥地へ広まった。金属器、ガラス玉、銃と弾薬など、年代により変化があった。インディアン戦争が激化した 19 世紀後半には、平原インディアン諸族は、銃をあやつる騎馬狩猟民となっていて、白人入植者たちの脅威であった。普通、北米先住民の文化領域区分は、16～17 世紀頃を基準にしている。

・スミソニアンのアメリカ・インディアン博物館は、4 月・5 月の講座でも解説したが、やはり国立の新博物館として、インディアン諸族の人々の参与のもと、新たに内容が設計された意義は大きい。新博物館のコレクションの中核には、20 世紀前半のインディアン民族資料収集家ジョージ・グスタフ・ヘイ（実業家、1874－1957）が設立したアメリカ・インディアン博物館（ニューヨーク、1916 年開館）収蔵品が含まれている。資料は 1989 年にスミソニアンに移管されたのち、法令により約 3 分の 1 はインディアン各部族に返還されたとのこと。また同博物館は、スミソニアンの博物館分館となっている。

・スミソニアンのアメリカ・インディアン博物館の、初代館長はネイティブ・アメリカンで

あった。W.リチャード・ウェスト・Jr 氏は、平原インディアンのシャイアン族出身。新博物館は、ネイティブ・アメリカン諸族の側の視点を大きく取り入れている。ワシントン D.C.のモールの一角にある国立博物館を訪ねれば、一日を費やしてもまだ見学は終わらないだろう（館長的発想）。各部族の世界観や、神話的世界も視聴覚的な展示で迫る。物質文化は優品が並ぶ。

・講座では、ニューメキシコ州アルバカーキのマックスウェル人類学博物館も訪ねる。規模は小さいが、長い先住民文化研究の成果を知ることができる。また地元で、ネイティブ・アメリカンの人々との接点という役割も果たしている。私が留学していたニューメキシコ大学人類学部の附属博物館であり、歴代教授陣の研究成果が分かる。南西部文化領域の研究に定評がある。

・平原インディアン諸族の最大の食料資源は、バッファローであった。食料の他にも、衣料、住居、装身具、儀礼、信仰、社会秩序、すべてにわたって、この動物が文化の中心にあったといっても過言ではない。バッファロー（繰り返しだが、アメリカヤギュウ、バイソンは同じ種）は、大群をなして大平原を移動し、群れがやって来ることが、インディアン文化の中での中心的な関心事であった。基本的に乱獲は行なわない。精神的には、バッファローは人間のためにやってくる兄弟のような存在で、バッファローと一体化して我々は生きているという認識は広くある。すなわち「バッファローとの共生」という考え方が、文化のコアにあった。

・バッファロー狩猟の歴史は非常に古く、約 13000 年前（パレオインディアン文化の前半）から、集約的なヤギュウ狩猟遺跡が発掘されている。スライドは、館長が参画したモンタナ州ミルアイアン遺跡の骨層の出土状況（ワイオミング大学ジョージ・フリソン先生発掘）。累々としてバッファローの遺体が堆積している。

・シャイアン族は、言語的にはアルゴンキン語族に属する。言語的に近縁の部族は、歴史的な系統が考えられる。アルゴンキン語族は、合衆国東部からカナダ東部に広く分布している（スライド）。アラパホ族、カイオワ族、クロウ族、ブラックフット族など。生活様式が似ているプレーンズインディアン同士でも、言語は多様で通じないため、大平原地域には「大平原手話」(PISL, Plains Indian Sign Language)、が発達していた。部族間の、交易用語、共通語の役割を果たしたという。

・スライドで平原インディアン諸族の文化を紹介。博物館のジオラマ、アメリカ絵画の歴史、博物館の収蔵品、歴史的古写真、他。シャイアン族の衣服は、バッファローの皮を加工して製作する。スライドの絵画は、ジョージ・カトリン作のマンダン族のバッファロー・ダンス。踊り手たちが、バッファローの頭部の毛皮をかぶって、動作をまねて踊るようす。

・またカトリン（1866）によるサン・ダンス（太陽踊り）儀式のようす。中心柱の周りで、柱から伸ばした紐（バッファローから作った）を踊り手の胸の皮膚に突き刺し、苦痛に耐えて踊る姿。柱にはバッファローの頭蓋骨がぶら下げられている。ドラマーはシャマンの皮太鼓を叩く。いかにもルース・ベネディクトが名付けた「ディオニソス型」の文化の型が伝わ

ってくる。次のスライドは、1909 年にサン・ダンスが行なわれた時のパノラマ古写真。サン・ダンスは近年も行なわれていて、実際に私は 1987 年に、サウスダコタ州で考古学のフィールドワーク中に、設備の木柱群の遺跡を目撃したことがある。友人に聞いたところ、数年前に行なわれた場所なのだという。

・アメリカ合衆国政府と開拓者たちは、このような文化構造を破壊するために、徹底的なバッファローの絶滅政策をとった。企業家、鉄道会社、西部の新興都市（コロラド州デンバーなど）は、こぞって毛皮だけを商品化して、バッファローの狩猟を進めた。かつて、北米に 6000 万頭生息していたと推定されるバッファローは、ほぼ絶滅した。鉄道会社のバッファロー狩り観光ツアーという信じがたい事例もあった。毛皮は、東部などの裕福な人々に、大人気の商品であった。防寒素材として非常に優れていた。北米大陸横断鉄道の拠点駅には、バッファローの毛皮が大量に集積されて、貨車で東部へ送られた。スライドは、バッファローの頭蓋骨が、山のように集積されている 1892 年の古写真（公開資料）。骨の山の上に立つ人物との大きさを比較できる痛々しい古写真。

・19 世紀末には、「幽霊踊り」(Ghost Dance) がグレートプレーンズに流行した。この儀礼で得た衣服を着用すれば、騎兵隊の銃弾をはね返す不死身になるという信仰が広がった。第 7 騎兵隊との戦いで勝利した後、いっそう合衆国軍の抑圧は強まり、ウーンデッドニーの虐殺（サウスダコタ州、1890 年 12 月）が起きた頃のことで、禁止令にもかかわらず、根強い信仰があったという。

・講座では、オマハ族について、ネブラスカ・リンカン大学図書館の HP から、公開資料アーカイブにより、民族資料の保存に関して紹介した。この大学は、東北大学考古学研究室と縁があり、ピーター・ブリード教授が 3 度の留学・在外研究に来て、また私の先輩、故松井章先生が、留学された場所。州立人類学博物館もある。年代を追ってのオマハ族の人々の古写真を紹介。文化遺産プロジェクト（Omaha Indian Heritage Project）の HP では、各種の貴重な民族資料（日本では民具という）が登録されているデータベースの一部が公開されている。パイプタバコ用具、首飾り、衣服各種、頭飾り、モカシン（なめし革製の靴）、バッグ・ポーチなど。一般的に全米で、かつて迫害された先住民諸族の人々の文化遺産は、博物館において保護されている。各部族への返還も制度化されている。以前にコレクター・アイテムとして収集された資料も、近年公的な施設に移管されているものも多いようである。しかし、まだまだ先住民の人びとの遺産という対等な視点で扱われているとはいえない状況を感じるところである。たとえば、合衆国建国時代や開拓史上の歴史資料とは、同列の価値で捉えられていない現状がある。

・プエブロインディアンは、ニューメキシコ州からアリゾナ州にかけて、多くの集住集落に暮らしている。いくつかを選択して紹介した。世界遺産に登録されて著名なのは、タオス・プエブロ（Taos Pueblo）である。11 世紀から 15 世紀頃にかけて建造された古いプエブロで、「タオス」とは北部ティワ語で「我々のムラ」の意という。アコマ・プエブロは、「天空都市」(Acoma Sky City) と称されて、比高 112m の砂岩質メサ（テーブル状の台地）の上

に立地する。アコマの土器制作は、芸術的にも高い評価を受けている。現在は工人たちが美術品として制作して人気がある（スライド）。アコマ・プエブロは、少なくとも 13 世紀からこの「天空の地」で防御的な集落を築いてきた。ズニ・プエブロ（Zuni Pueblo）は、アリゾナ州境近くの、ズニ川の河畔のメサの頂上付近に立地している（古写真）。これらのプエブロは、ニューメキシコ州にあって、いずれも古い歴史を持ち、連綿と受け継がれてきた場所である。1680 年に、スペイン人たちに対する「プエブロインディアンの反乱」(Pueblo Revolt) が勃発した。ズニ族は、1692 年に防御的な地形の現在地に移住したとされる。

講座では、プエブロインディアンの古写真や、研究史上の民族誌から、プレーンズインディアンとは、かなり対照的な歴史と生活について紹介した。しかし、多くのネイティブ・アメリカンの人々には、共通する自然の捉え方がある。現代社会とは違い、人間と自然を画然と分離せず、ヒトと自然の一体性を大切にする。大地の恩恵が我々を生かしてきた。多くの創成神話が伝えられている。自然と共生することは、非常に重要なことなのである。話は飛躍するが、自然との共生という文化は、私たちの祖先の縄文人たちも確かに有していたことを思い出そう（館長講座令和 6 年 3 月「縄文の思考・弥生の思考と現代」）。

最後になりましたが、一年近くにわたり、館長の定期講座にお付き合いいただきまして、誠に有難うございました。

（本稿は、館長講座での配布資料に、当日スライド内容を踏まえて補足したものです。）